連載・イタリア「第二のルネッサンス」の現場訪問記②

時間を豊かに使う生活

●ルポライター　今崎　暁巳

住宅・食生活・村づくり

〝時間の豊かさ〟を軸に、ホンモノの豊かな暮らしをつくりだすことに、多くの日本人が気づきはじめた徴候を、いたるところに見出すことができるようになった。

八八年一月六日の朝日新聞「声」欄が〝豊かさってなあに〟の特集を組んだなかから、二〇代、三〇代の二人の主婦の声を紹介しよう。

二〇代の女性は幼い時、母の手作り弁当持参で近くの公園、博物館などに連れていってもらった記憶を述べ、こう書いた。

「結婚して、子どもができた今、私はあの頃の母と同じことをしている自分に気づきました。主人の休みの日は、おにぎりを持って近くの公園で食べる、それだけなのに子どもたちは大喜びで、私の幼い日とそっくりなのです」

三〇代後半の女性は、オイルショックをこえ、「省エネと節約」で消費を控え、国民が働きに働いてきたことにふれて書いた。「疲れた。惨めだ。家のためにあくせく働き、毎日を生きているのは。

オカシイ。みんなで国民総生産（GNP）を盛りあげてきたのに、ウサギ小屋のために終生働きバチで送らなければならないなんて。

だまされたくない。『真の豊かさは心の持ち方にあるんだよ』なんて。『ボロ小屋に住んでも心は錦』なんてやっぱりイヤ」

◇――豊かな時間をすごす　豊かな空間＝住宅

世界に例をみない経済の急成長のなかで噴き出し始めた分配・消費生活の矛盾を前に、今、その問題解決の糸口が、国民生活の現場で見えはじめているということではないだろうか。

二人の女性の声を結べば、働く努力にふさわしい、少なくとも欧米並みの空間に住み、恋人や家族と時間を豊かにすごす暮らしこそが、現在の働き盛り日本人が心から求めている生活要求の中身であることは、実に明快なのだ。

その視点から、イタリア北部での働く二世代の地域生活のありようを見ることにする。フィレンツェ市郊外にある小さなコムーネ（村）に住むゴリーニ・ピャンピャニーノさん夫婦と三人の子どもたちの暮らし方と、その食住のありよう、団らんの仕方について。

私たちが訪ねたのが日曜の午後だったために、近くに住む次男ダーリオさん夫婦も、ゴリーニさん夫婦の住む建築協同組合で、九年前に建てた4LDKマンションに集まって、一緒に話をきくことができた。

「一二〇世帯で建築協同組合をつくって、国から融資を出させてこの団地を造った……。ゆったりして、五階建で、全部で一二〇戸、いいなぁ、日当たりはいいし、広場は広いし、ああ、一生住む集合団地って、こういうことなんですねえ……」

同行した大阪の有名大企業M電器の課長夫人Wさんが嘆声を発したほどに、道路に面した一方だけをあけ、三方に棟が広がり、その真中にとった花壇などのある小公園広場と駐車場は、公団住宅のせせこましさに慣れた日本人には、いかにもゆったりとうらやましいかぎりである。

三階のゴリーニさんの一部屋一部屋を見せていただいて、同じ4LDKの表現でも、日本のそれと広さ、質ともに格段の違いがある状況も、しっかり見せていただいた。

まず、広さでいえばDの広さが、われわれ五人の訪問客をふくめ、一二、三人は坐れる食卓の他に六人ほどの向かいあえるソファ椅子のテーブルがゆったり入って、まず一六畳のスペースはあり、Kも六畳はあるとなると、これで二二畳。そして、今は近くに別世帯をもつ息子二人の部屋も一二畳はあり、末娘の部屋、夫婦の部屋と書庫の一部屋とつなげてみると、単位の広さの違い、備えつけの家具調度の広さもふくめ、なるほど、ロザンナが広さは日本の約三倍です、と言いきる実態がよく理解できた。家具調度も備え付けで、予算のワク内ならそれぞれのオーダーで材質設計を選択できるのである。

「なに？　これでローンが月九〇〇〇円の返済、ウッソォー！　九年前から払いはじめて、あと六年で終わる。つまり、ほとんど日本円にして利子込みで四〇〇万円でこの住宅が手に入る……」

ちなみに、ゴリーニさんが働いていた六〇歳までは、フィレンツェ生協職員で約一四万円の給料で、当時はその一五%にあたる二万円ほどを月々払い、退職してからは一〇万五〇〇〇円ほどの年金の八%にあたる九〇〇〇円を払っているということなのだ。

この住居費の内容と住宅の質の良さだけとっても、その状況を作り出している建築協同、生産協同組合の力もふくめ、「声」欄の二人の女性の求める暮らしの〝豊かさ〟の第一条件が、まずイタリアではかちとられつつある一端を指摘できるだろう。

◇――村づくり・仕事おこし三七年

「私がなぜウニコープ・フィレンツェ生協の職員になったかというと、第二次大戦でアフリカ戦線に行かされるまで、商業関係の仕事をしていたのを生かして、もっとこの町で根を張って暮らしたいと、捕虜生活を経験して、戦後の厳しい暮らしのなかで考えたからです。」

六四歳になる父親のゴリーニさんが、その世代にしては珍しい消費生協の職員だったことをきくと、一九四九年くらいからはじまったフィレンツェの消費生協（今は三〇万組合員のイタリア第二の地域生協）運動のルーツを語ってくれた。イタリアは協同組合先進国の一つではあるが、五〇年頃はこの地域でも、一〇〇人くらいの組合員、二人の職員といった、小さな活動でしかなかったのが現実で、そんな村の暮らしのなかに、ゴリーニさん夫妻が新しい村づくり、仕事おこしの夢をかけて生協の店を作りはじめたのが、三七年前ということ。

「日本では、商業部門でも大企業が地域生活の隅々まで入りこんでいますが、いわばこの村では、ゴリーニさんの協同組合がどんなふうに村のなかで力をもってきたかが、戦後四一年間のこの村の経済や暮らしの移り変わりの大切な状況を語っているようにも思えますが……」

私が水を向けると、夫とともに地域における事業と協同生活づくりに働いてきた妻のジューリアさんが、きっぱりと言った。

「私は今、大変しあわせです。こんなふうに村の協同化の仕事を三七年間つづけてきて、退職後、こうして年金生活でしかも自分たちの建築協同組合でつくったマンション暮らしができるなんて……。この団地には同じ思いの年金生活者が大勢いますし、しかも若い子どもたちの暮らしとも協力しあって、私は今、最高の状態で生きているように思います」

この、日本でいえば大正末年世代・六〇代前半世代、いわば戦後民主主義生活を開拓した人たちが、イタリアではどんな思いで家庭をつくり、つぎの三〇代から二〇代の三人の子どもたちを育ててきたか――。私は、まず親たちの暮らしぶりに注目した。

「このクッキーおいしいけど、お母さんの手作りなんですか？」

Wさんが聞くと、即座にジューリアさんの答えが返ってきた。

「この子たちの生まれた時からずうっとそうです。クッキーもパスタも料理はみんな私の味……。娘たちもみんなそうしています。日曜日には、たいがい子どもたちがここに来て、私の味、娘の味それぞれを楽しむんです。」

まず気がついたのは、料理は一人ひとりの味を楽しむものであり、加工商品がCMとともに食卓に氾濫してしまう日本の食生活の現状とは大きく異なる、個性豊かな、人間の顔の見える食生活の楽しみが、たしかにそこにあること。

それと、すでに別居している息子たちの部屋を見せてもらって、ゴリーニさん夫婦の、子どもたちへの素直でやさしい親心が伝わってきて、思わず胸が熱くなった。

「これは、小さい時に抱いていたぬいぐるみの熊、これは、高校の時着ていたサッカーのユニフォーム」

ジューリアさんがなつかしそうに声をはずませて説明して下さる。兄弟の部屋はベット・机から調度品、賞状の類まで、そっくりそのままの状態で、塵一つないように管理されているのだ。長男も次男も、三〇代半ばになった今でもここに戻れば、昔の思い出とともに、親子水入らずの一夜をもつことが、いつでも可能なのだ。親と子が、過去も現在も、ともに大切にしあう、やさしい心の通い合いのある、この家族の暮らし。

◇――スープのさめない距離での三世代の暮らし

この親に育てられた三人の子どものうち、二〇歳の末娘クルスティナさんだけが、目下仕事探し中で両親と暮らしている以外は、二人の息子たちは結婚し、それぞれ近くに世帯をもち、自立して暮らしている。長男は公務員で、この日出会えた次男ダーリオさんは農協の職員、妻のウージールさんは公立病院のケースワーカーをしているということ。ちなみに給料は、夫が三四歳で約一〇万五〇〇〇円、妻は二九歳で一一万円。やはりイタリアでも、農協職員よりは公務員の方が賃金がよく、同時に、男女の賃金格差がほとんどない点は、日本とだいぶ違っている。そして、夏休みは農協で一ヵ月、公務員は四〇日以上あるとのこと。

「ただ、住宅が私営マンションのため大変高くて、二万七〇〇〇円ほど払っています。」

と、お父さんの建築協同組合住宅をうらやみながら、つけ加えた。

「これは格別に高い方で、イタリア人がみんなこうだと思わないで下さい」

なお、将来、ゴリーニさんの協同組合マンションに入れるのは息子たちだけで、他人には売らないのが条件ということ。このへんにも、あくまで住民、組合員の生活を第一にする、イタリアの生産協同組合の本質が表われている。

「これがスープのさめない距離で暮らす、イタリア型の新しい三世代の暮らし方なんですね」

同行した四〇代になったばかりの大阪よどがわ生協の柴田専務が言えば、ダーリオさんが大きくうなずき、日曜ごとに、この日は会えなかった長男の子どもたち、つまり孫たちもいっしょに、とてもにぎやかに、ジューリアさんのいう〝最高の生き方＝三世代交流〟が実現するということである。

人間生活創りかえの土台

◇――経済におけるイタリアの奇蹟―活性化の質

●経済発展についての識者の指摘

イタリア人自身が〝第二のルネッサンス〟と呼ぶ、深く広く大きい人間生活創りかえの大運動が進行しつつあるなか、われわれ日本人が自分たちの課題との関係で、ぜひ見る必要のある視点の一つに、ここまでふれてきた市民一人ひとりの暮らしを豊かにし、誰もが自分を表現できる人間関係をもつように地域・家庭生活の変革が進んでいることと、経済における〝再びのイタリアの奇蹟〟といわれるほどの、中北部における活性化との関係がある。

もちろん、この稿では、イタリア経済の実情を分析することは任ではないから、その点は専門家にお願いしたいということと、南北格差、原油輸入など、貿易収支赤字、あるいはイギリス、フランスをぬき、西側第四位のGNPになったといわれる生産状況にも、大規模な人べらしが顕在化しつつあるとか、多くの矛盾をかかえている事実も念頭におくことが必要である。

にもかかわらず、生産の全体状況が、西ヨーロッパで西ドイツにつぐ指標を示し、ソフト開発、ハイテク応用、車・ファッションのデザインなどで世界市場を席捲するビジネス開拓など、ハードからソフトの時代に入ったといわれる国際情報化社会づくりの新しい波になりつつある状況を、磯村尚徳氏など西欧を熟知した識者が指摘していることが重要である。

さらに、一一月にNHKラジオの経済の時間で、岡本法政大学教授が、イタリア経済活性化の中身は、大企業でなく中小企業であり、協同組合の存在である、と指摘した点こそ、この稿で追求する〝時間を豊かに使う〟暮らし、〝一人ひとりの暮らしを大切にする町づくり〟こそが、二一世紀の経済活性化の力になっていくという視点を提起していた。

つぎの二つの表現が印象に残っている。

「たとえば、バックとかファッションの世界で名高いブランドも、もともとイタリア各地の中小都市での伝統的な中小企業、技術者集団の世界であり、生産を生みだす協同組合の人間関係なのです」

「かなり強い意味で、個人一人ひとりの生活を大事にする暮らし方が根づいていて、職場を五時に出て、車で一五分くらいで家に帰り、食事を八時くらいまでとり、外に出て一二時くらいまで楽しむ毎日――それが、あらゆる意味で、経済の活性化につながっているところが面白いと思います」

●経済を活性化させたものは何か

私自身は、経営者でも政治家でもないから、主婦ロザンナと同じ平面から、自分たちが求めている〝豊かな暮らし〟をはっきりさせることのために、イタリアを何度も訪ね、この中間報告も書いているのであり、では、その豊かな暮らしをどんな経済的分配、政治的参加によってやるかは、むしろ中身を確定するなかで考えてほしいくらいの気持ちだった。ところが、経済の専門家のなかから、そういう今までの日本なら〝個人主義〟とか〝遊び人〟などと一言で否定されたような〝人間の豊かに時間を使う暮らし方〟こそが、経済を活性化させる力なのだといわれてみると、あらためて不思議な感慨にとらわれざるをえない。つまり、同世代の日本人として、相当強く自己を表現してきた一人と思っている私ですら、ある種の感慨にふけるほどに、今までの日本では時間外労働をしないこととか、夜は恋人と食事をして映画を観ることとか、土曜・日曜は自分の好きなことで時間を使うこととか、どれ一つとっても、ぜいたくで、自分勝手で、生産と生活を大事にしない、よくない自由主義的人間像とされてきたということである。その底には、そんな遊び人が増えたら、国は亡びるという恐迫観念が、明治維新以来、戦後高度成長時代になっても形をかえ、言い方を変え、絶えず私たちの暮らしのなかに政治家、経営者によってもちこまれてきている事実を指摘しないわけにはいかない。

大切なことは、資本主義経済制度のもとでも、イタリアほどに協同組合化が進み、住民による暮らしづくりが深まるならば、そこから中小零細企業の新たな可能性、そして、福祉・文化・子育てをつなぐ地域社会での仕事おこしの分野にまで、新たな風が吹きはじめている点ではないか。少なくとも、イタリアにおいては、その新しい風のなかで、独占大企業でなく中小企業、協同組合が地域経済の中枢をなし、国家よりも各地域の個性がきめ細かく表われつつあるほどに自治が限りなく住民本位になってきている現実を、中・北部諸州では各地に見ることができる。つまり、資本主義制度の宿命・タブーといわれた弱肉強食、中央集権、支配管理の法則をつき破る、新しい多数派住民による人づくり・町づくり・文化づくりが地域生活の底辺から形をなしはじめているということである。

◇――住民自治―豊かなパフォーマンスのレポート

この住民自治の深まり、一人ひとりが職場・地域生活をつなぎ、豊かに自己をパフォーマンスする暮らしの前進が、今、イタリアで、どんな急速な暮らし方の変化を生んでいるかの実例として、例の中北部に多い〝人民の家〟の変貌、活性化の状況を見てみよう。

●中北部〝人民の家〟にみる変化

「〝人民の家〟が過去のものになってしまうかという危惧は確かにあります。戦中から戦後にかけて、キリスト教徒、社会党員、共産党員、さまざまな住民がここに集まり、考え方の違いをこえて語りあい、地域生活の指導的役割を果たしてきた関係は確かに大きかったと思います。しかし、一九六〇年代に入って、リーダーとか、顔見知りしか集まらない傾向がでてきていたのです」

三度目のイタリア訪問をする前、イタリアの新しい自治・暮らしづくりをずっと見てきて、現在、日本生協連に勤務する大津さんと意見交換するなかで、話しがでたことだった。

確かに、一年目、ボローニャ市の

コルティチェラ人民の家を訪ねた時の印象に、大津氏の指摘はぴったりだった。あの時の高齢者中心の、誠実ではあるが沈滞した空気が私の脳裏にこびりつき、ただ一人三〇代後半のボッカフォリさん（地区アルチ会長）が、なんとか若い人も集まる場所にするため工夫しています、と控え目に語った人なつこい眼差しが、記憶に残っていた。

二年経ち、ボッカフォリさんと再会した時、私の胸には不安と期待が相半ばしていた。二年の工夫で、いくらか変わったのだろうか……。成果がまったくないなら、わざわざ日本人に見せるようなことはしないだろう……。

現場を見る前に、ボローニャ県全体のアルチ会長カビーナさんが語ってくれた、アルチ会員（イタリアの幅広い文化活動の組織で、二五〇万人もの会員がいる）の生活づくり・文化づくり全域にわたる日常活動の内容は、想像をこえるほど大きく広い生活創りかえ運動の質をもっていた。それは私の不安をふきとばし、二年の間に彼等が力を入れ、地域の変革のためにとり組んだ豊かな活動内容だった。

「ボローニャ市四八万人で、人民の家九〇、サークル四〇〇、そして市の文化センター一八、スポーツセンター六、児童センター一二があり、県レベルで八万人のアルチ会員が行動しています。一〇の活動分野があり、まず今、核兵器廃絶と、危険な核から私たちの町を守る国民投票を成功させる行動を、環境のたたかいとして取り組んでいます」

まず、この原子力開発そのものを住民自治でコントロールしようとする運動の展開は、まことに画期的。その内容を国法で定める国民投票が、八〇％をこえる圧倒的国民の意志で確定し、日本のマスコミにも大きく報道されたのは、このあと一ヵ月ほどしてのこと。

●アルチの活動分野

「ゼロ歳から一八歳までの子どもたちのこと――自由時間の過ごし方、さらに夏休みをどうするか、暴力問題の対応、そして、一人ひとりをつなぐ電話の友だちづくり……」

テレビ、コンピュータなど、アメリカ型情報社会化のなかで孤独になっていく子どもたちを、社会的に育てようとする運動――私はアルチの運動が、子育て協同運動の必要が叫ばれる私たち日本の最重要な課題の一つと思われる状況に、大胆に正面からふみこんでいる事実に眼をみはった。子どものふれあい、成長の基本課題を、地域の青年・大人が運動としてとり組んでいるのだ。

さらに、食品添加物から料理、レストランのあり方までふみこむアルチコーラの運動から、女性だけでなく、男女とも自立し、平等に生活する新しい生活文化づくりの運動。そして、「人民の家」の新しいあり方を創りつつある、仕事後の自由時間の新しい使い方を工夫するメディアアルチの運動――このあたりの運動は、今、日本でもしだいに生まれ育ちつつある運動といってよく、とりわけ、労働後の男たちの時間の使い方などは、日本企業社会のアキレス腱といえるのだ。

一〇の活動分野は、さらにきめ細かく日常に迫る。

○全サークルの四〇％を占め、ボローニャ県のスポーツ活動の中心となっているUISP（ウィスプ）のような、最も大衆的なスポーツ組織の活動。

○「人民の家」でのトンブラー・カード、ビリヤード、そして釣りのような庶民的娯楽活動。こうした誰でも参加しやすい分野をベースに、さらにハイテク・情報化の害、食品公害、洗剤汚染、車公害など、資本主義が人間生活を破壊する害と積極的にたたかい、新しい市民の権利をつくり、人間性を育てる運動にいきいきと取り組んでいるのだ。

しだいに、イタリア市民の生活創造運動が形をなし、人民が主人公の「第二のルネッサンス」期に入りつつある実体が明らかになる。

◇――文化の活性化――「人民の家」の変貌

●文化は「うける」ものでなく「つくる」もの

コルティチェラ人民の家（カーサ・デル・ポポロ）の変わりようについて、まず、道路から見えるバールの雰囲気の変化に眼をみはった。二年前には、六〇歳代以上の三人の男性が背中を丸めていた状景に比べ、この日は一〇人近くのワインを飲む人にも、三〇歳代から七、八〇歳代とバラエティに富み、そのうえ、ウインドーの前には、オートバイを並べる二〇歳前後の八人ほどがたむろして、私たちを珍しそうに人なつこい表情で見ている。

「なかの改造がされたといえ、建物が変わったわけじゃない。二年の人の混りあいの工夫の結果、こんなふうに地域の人が誰かと出会うため

にここに来るようになった……。そういうことですね？」

私の感想に、ボッカフオリさんの言葉が返ってきた。高度成長型の、人間をダメにする消費文化に対し、必要な文化的行動をするのだと。

「家でテレビを見るだけとか、老人だけ部屋にとじこもるとか、誰もがバラバラにされ、与えられるだけで人間どうしのふれあいがなくなる。便利さと効率の文化〟でない、私たち自身の文化を持つこと――文化はうけるものでなく、やるもの、するものなのです」

私はその時、イタリアでの、自らの文化づくりの運動に感激したある生協代表が「アメリカ型文化とのたたかいですね？」と言ったら、カビーナ県会長が複雑に微笑み、「日本型ということでもあるでしょう」と答えた言葉を思い出していた。

文化はうけるものではなく、するもの――なんと明快な生活行動の指針だろう。

私は「人民の家」活性化、アルチ文化活動の真髄を聞く思いで、わくわくしながら、ボッカフオリさんについて、まず四階のホールをみた。二年前、だだっ広くて、殺風景に会議用椅子が転がっていた風景を思い出しながら。

十分に使いこみ、磨きあげているフロアの光沢。調和のとれた小ステージとグランドピアノの配置。照明用具や明日の催しのために準備された飾りつけ……。一見して、二年前の中高年リーダー会議場の様子とは一八〇度方向を変えた人間の色つや、匂いが、そこここに立ちこめていた。

「会員の自主運営で、水・土・日と一週に三回、ダンスパーティーをつづけています。土曜はアンヂェロ・ゲラとかグリ・アレグリ楽団とかの生オーケストラが入り、六〇〇〇リラ（七〇〇円弱）の会費で三〇〇人が来ますし、水・日はステレオ音楽ですが、一五〇人ほどが楽しみます。このダンスグループだけで、年間五五〇万円ほどの収入が生まれています」

このホールは他に、障害者の人たちの祭りとか、麻薬患者の更生のための集いとか、プロの俳優・音楽家も加わるさまざまな催しが行なわれ、年間一〇〇〇万円をこえる成果を生むようになったのだ。

●生命は人と人とのネットワークづくり

あの薄暗く、人を拒むようだった空間が、人間どうしの愛情と連帯と文化の形で日常性を持つ時、わずかな年月で、これほどまで人の匂い、色、暖かさを生み育て、週に一度や二度は住民が足を運びお金を使っても、歌い、踊り、飲み、語りあうことをしないではいられない空間に変身してしまうのだ。

大切なことは、「人民の家」がオピニオンリーダーの集まりの場から、地域の老若男女、子どもまでが毎日自己実現しパフォーマンスする場に変わったということ。それが人間の出会い、創造を生み、仕事も創りだすこと。

「二階はアルチの事務所、スポーツ、婦人団体、社会党、共産党などの政党、ゲイの権利を守る運動の事務所まで、十数団体の部屋が並び、会議室をふくめ使用料が入りますし、一階のバール、それに地下の一五〇席ほどの小劇場を七〇〇〇万円ほどかけて機能を充実させ、子ども向け、若者の集まる芝居、ミュージカルの空間づくりに力を入れています。二〇歳代、一〇歳代をひきつけるポイントを、この小劇場とヨガ、柔道、体操に焦点を合わせた体育館の活用の二つにおきたいと思っています」

ボッカフオリさんと協力して、このカーサの活性化の企画を進めるプロデューサー、ブルーノ・トサレーリさんが説明しながら、「結局、施設が生きるも死ぬも、人と人の心をつなぐきめ細かい企画、人と人とのネットワークづくりが生命です、と何度も強調した。

会長とともに、このコルティチェラの人と人の心をつなぐ文化の館づくりに、三三歳の人生をかけるトサレーリさん――利潤や商売でなく、心底からこの町に生きる人と人が結ぶ力で、わずか二年の間に、七人の常勤職員の生活費を支払い、すべての参加者・参加団体で仕事と暮らしと文化をいきいきと創りだすことをはじめたコルティチェラ人民の家の人びと。

私は、〝第二のルネッサンス〟とイタリア人自身が呼ぶ、地域住民が主人公となり、創造する新しい暮らしと文化の世界の一端をそこに見ている。